

岡倉天心



(茨城県天心記念五浦美術館提供)

文久2年(1863) - 大正2年(1913)。横浜〔神奈川県横浜市〕生まれ。本名は覚三。幼時期に私塾で英語を学び、東京外国語学校を経て、東京開成学校〔東京大学〕に入学。このころ、フェノロサと出会う。卒業後、文部省〔文部科学省〕に入る。明治22年(1889)の東京美術学校〔東京芸術大学〕開校に関わり、西洋画の良いところを取り入れて新しい日本画をつくろうと努力する。翌年東京美術学校長に就任。その後、明治31年(1898)に日本美術院をつくり、日本美術の研究に取り組み、同37年(1904)に渡米し、ボストン美術館顧問となる。同39年(1906)に日本美術院研究所を五浦〔北茨城市〕に移転し、ボストンと五浦の双方で活動した。インドや中国、日本美術など東洋の文化を世界に伝える。

岡倉天心は、横浜〔神奈川県横浜市〕で貿易商の二男として生まれました。幼いころに英語を学び、東京開成学校〔東京大学〕に入学しました。そこで、英米文学などに関心を持ちますが、外国人教師アーネスト・フェノロサに会ってからは美術を学ぶようになりました。学校を卒業後、天心は文部省〔文部科学省〕に入り、奈良や京都をめぐり、日本の古い美術品を調べました。

(最近、西洋の美術品が入ってきて、日本の古い美術品の良さが忘れられ、売りに出されたり、こわされたりしている。これらの美術品を守り、日本の美術のすばらしさを多くの人に伝えたい。)

その後の天心は、美術学校の開校にも力を尽くし、明治22年(1889)に東京美術学校〔東京芸術大学〕ができると、翌年に校長となります。また、「古社寺保存法」の制定に努力し、文化財が国宝として保存されるようにもなりました。

しかし天心は、その後一部の先生たちとの対立により、美術学校から追われることになってしまったのです。

(このままではいけない。もっともっと美術の道を極めなければいけない。日本の伝統美術を生かしながら、新しい時代にふさわしい美術をつくり上げなければ。)

そこで、東京に日本美術院をつくりました。天心は「画家たる前に日本人たれ、東洋人たれ」が口癖で院生を熱心に指導しました。横山大観(P.85 参照)ら若い画家たちが、研究して次々と作品を発表したにもかかわらず、それらは「朦朧体」などと批判され、なかなかその価値を認められませんでした。そのころ天心は、イン



六角堂 (茨城大学五浦美術文化研究所内)

ドの古い美術を調べるためにインドに行きました。この調査により、インドの古い美術は中国や日本の美術に影響をあたえていることをはっきりと知ることができました。(インドや中国、日本など東洋の文化のすばらしさを世界に伝えたい。)

その後天心は、多賀郡大津町〔北茨城市大津町〕出身の画家、飛田周山の紹介で、日本美術院を東京から、五浦〔北茨城市大津町五浦〕に移しました。天心は、五浦の風光明媚な土地を理想の地と考え、五浦を「東洋のバルビゾン<バルビゾンとは、19世紀にミレーに代表される風景画家が集まったフランスの村の名前>」と名づけました。横山大観、下村観山、菱田春草、木村武山(P.27 参照)も、一家をあげて五浦に引っ越して新しい日本画に一生懸命取り組みました。そのため、彼らがここで描いた日本画は、展覧会で多くの人たちに認められ、今もすぐれた作品として評価されています。

天心は、日本美術界の指導者として活躍するとともに、アメリカのボストン美術館で仕事をするなど、国際的な活動を続けますが、大正2年(1913)、静養先の新潟県赤倉で亡くなります。天心の死を契機に東京で日本美術院が再興され、日本美術院の五浦時代は終わりますが、短い期間の中で、日本近代美術史上に残る数々の名作が五浦の地で生まれたのです。

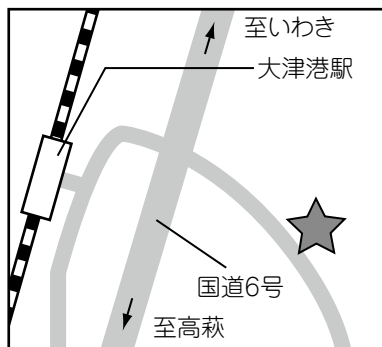
現在、天心の屋敷や六角堂を含む地域は、茨城大学により茨城大学五浦美術文化研究所として管理され、日本美術院研究所跡は天心遺跡記念公園として整備されています。

ゆがりのスポットに行ってみよう

茨城県天心記念五浦美術館

所在地 北茨城市大津町椿 2083

内容 岡倉天心や横山大観をはじめとする五浦の作家たちの業績がわかるとともに優れた作品が鑑賞できます。



おもな 参考文献

『岡倉天心全集(全9巻)』(平凡社・1978～81)

『岡倉天心―物二観ズレバ竟二吾無シ―』(木下長宏・ミネルブア書房・2005)